

聖書を読む会 通信



母マリヤと幼子イエス

世界福音同盟 霊的大使 福田 崇

ある時、インターネットでマリヤの賛歌を聞きました。ルカの福音書に記されているマリヤが主を賛美する歌です。マニフィカトと言われミサ曲には必ず入っていて、典礼で礼拝する教会では、夕べの祈りのときに毎日歌われています。

マリヤの賛歌を聞きながら、画面に次々と出てくる母マリヤと幼子イエスの絵が、二つのグループに分けられることに気がつきました。両者とも、マリヤが幼子イエスを抱いている絵です。一つのグループは、マリヤがイエスを慈しみの目で見つめているもので、もう一つのグループは、マリヤが天を仰いでいる絵です。

マリヤは、「ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおりこの身になりますように。」(ルカ 1:38)と応答して主のみこころを受け入れました。またイエスが誕生した後、羊飼いたちが訪れたとき、「マリヤは、これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。」(ルカ 2:19)と聖書にあります。

「お告げの祈り」は次のように祈られます。

主のみ使いの告げありければ、マリアは聖霊によりて懐胎したまえり。

われは主のつかいめなり、おおせのごとくわれになれかし。

しかしてみことばは人となりたまひ、われらのうちに住みたまえり。

「友の祈り」 奥村一郎

マリヤは救い主を宿し、その母となり、育てるといふ主からの贈りものの神秘を思い巡らして生涯を歩きました。じっとイエスを見つめつつ、この不思議な主の御業を味わいました。それが、イエスを抱いて見つめている絵だと思えます。と同時に、そのことの責任の重大さゆえに、天を仰ぎ主の助けを願ったのではないのでしょうか。それが、天を仰いでいる絵です。

私たちも、イエス様を心にお迎えしています。クリスチャンとして、使命が与えられて生きています。いのちのプレゼントをいただいています。この二つのグループの絵のように、二つの姿勢が必要でしょう。